企画展「顕神の夢―幻視の表現者―　村山槐多・関根正二から現代まで」
真島直子氏アーティスト「ト」トーク採録

大長 悠子　編

このアーティストトークは、2024年1月6日(土)～2月25日(日)まで碧南市藤井達吉現代美術館で開催された企画展「顕神の夢―幻視の表現者―　村山槐多・関根正二から現代まで」に関連して行われたものである。本展出品作家でアーティストの真島直子氏に、インタビュー形式で自身の作品や制作背景について語っていただいた。

以下はその採録である。なお、採録の掲載に際しては、語調を整えるなどの編集と、人物名や展覧会名等の補筆、(　)内に編者による補足を行った。

『真島直子氏アーティスト「ト」トーク』
日時：2024年1月20日(土)　14時～14時半
場所：碧南市藤井達吉現代美術館　展示室2
講師：真島直子(アーティスト)
インタビュアー：大長悠子(当館学芸員)

真島直子氏

会場風景

――――現在開催しております顕神の夢展の記念イベントとして、「真島直子氏アーティストトトーク」を始めさせていただきたいと思います。まず、本日お招きした出品作家の真島直子さんのプロフィール[1]を簡単にご紹介いたします。(中略)今日は、真島さんに今回の展覧会の出品作のことなどを中心にお伺いしていきたいと思いますが、アーティスト「ト」トークということで、会場の皆様にも直接真島さんとお話できる機会にさせていただきたいと思っています。この後、皆様からもご質問などを頂戴したいと思っていますので、ぜひ積極的にご参加いただきますようよろしくお願いいたします。
それでは、僭越ながらまず私の方から質問なのですが、今回の展覧会の「顕神の夢」というテーマを初めて聞かれたときにどのように思われたのか、教えていただいてもよろしいでしょうか。

真　島：まずは、驚くようなタイトルで、美術展において一般的には聞かないようなタイトルだと思いましたね。言葉で聞いたときはあまりピンとこなかったんですが、「顕神」という字を見たら、顕微鏡の「顕」だし、「えっ、神？」と(驚きました)。
この企画を始めに発案された足利市立美術館次長の江尻潔さんと川崎市岡本太郎美術館館長の土方明司さんが中心となってこの展覧会をやろうと決めたということをお伺いしています。江尻さんとは結構飲む機会も多くて、常々「神」が話題にあがったり、「真島さんは神とかを

信じますか？」ということをよく質問されたりすることがありました。まぁ私は神から嫌われているから、向こうが嫌がってるんじゃないかってことを話したことはあります。
私はそんなに詳しくはないんですけど、美術をやっている人たちは、割と神とかそれに近いようなものを体験しているだろうってことは、今回の他の現代作家やあるいは古い作家、円空や出口なおさんといった人（の作品）を見ても、その方たちはどこかでそれが大きなテーマになって制作なり自分の活動をされてきていて、やはりそういう方が結構いらっしゃるのではないかと思います。美術も音楽もそうですけど、宗教がテーマで出発した歴史がありますよね。ですからそれを無視できないというか、いろいろ面白い取り組みの仕方をするんだろうなと思い、（今回の展覧会を）楽しみにさせていただきました。ですから喜んで参加したいってお答えしました。

――宗教や神といったことをテーマにして制作する作家さんもいるという実感などをお話しいただきましたが、真島さんは、ご自身の作品が「顕神の夢」というテーマや、いわゆる目に見えないものや世界とどのように関連していると思われますか？

真　島：うーん、やっぱり一般的な「神」ではないと思うんですね。要するに宗教的な「神」ではなくて、得体の知れないものの実在、人間を超えた、人類の生きざまのようなものだけでは理解し難いような出来事。目に見えないものの実在を感じずに来た人はいないんじゃないかなと思います。私自身も神っていうと神棚にある「神」だと思うんだけど、そうではなくて、目視することができないものですね。目で見える実在っていうと例えば鉄とかなんとかっていう素材。（それではなく、）精神的な、メンタルなところでなにか不思議な存在を感じることは日常的にあると思いますし、特に制作しているとこういったことが大事なファクターにならざるを得ないような気がします。もちろん作品として目に見えるものに変化していくわけですけど、そこに至るには訳の分からないことの方が多くて。実際に分かって描いている人とか作っている人がどれほどいるのか。私の場合にしたら、むしろメンタルにおいて絵の不思議さと出会うことの方が多いような気がしますね。

――「目視できない」、見えざるものを感じながら作品を作るということ、制作中に訳の分からない、いわば説明し難い境地になるということ、非常に印象的でした。具体的に今、作品が目の前にありますので、これからはこちらの出品作の方に話題を移して伺っていきたいと思います。今回出品しているオブジェ（fig.1）と平面作品（fig.2）、どちらも《妖精》というタイトルの作品ですが、それぞれの作品の制作の背景や経緯をお聞かせください。

真　島：大学は油画科を卒業したんですけれど、自分（の意思）で学校に行ってて言うのもおかしいんだけど、油絵っていうとどうしても西洋絵画、歴史的なものとかいろいろ絵画を描くっていうそちらの（絵画技法や理論等の）方だけで。学生時代は例えばいつもテーマが人体だとか。毎日毎日モデルさんに来ていただいて、教室に入るとすっぽんぽんの裸の方が来てて、テーマがそれになってるんです。確かにそれがお勉強という意味なのかもしれないけれど、意味がよく分からなくて。卒業してから急にモデルはいなくなるわけで、自分自身の表現というものをやっていきたいと思ったときに、自分が何に対して何を表現したいのかという大きな壁にぶち当たり、なおかつ金もない。アルバイトして稼ぐにもたかが知れた金額です。学生時代も画材屋に借金で追い掛け回されてトイレに隠れたりなんかもしましたけれど。昔は学校のなかに画材屋があったわけではなくて、外部から来て注文を取っていくんですけど、画材屋が集金に来るというと休んだりね。あの当時でサラリーマンの初任給が月給２万円くらいだったように思うんですけど、５万円くらいの材料費を集金に来るのでとても払えないんですよね。（金銭的に）追い詰められていて、そして学校を出たらアトリエもない。東京近辺に住んでいる学生さんは自宅で出来たんですけど、私は名古屋から出てきた人間で部屋を借りるなんてことをすると、まるで想像を絶する生活になって。それで、油絵じゃなくてもいいんじゃないかなってこともあって、その辺の紐だとか手近にある材料から制作らしきものをこねこねぐちゃぐちゃやってた記憶がありますね。
それともう一つ、油絵に対する反抗心がありました。西洋のものだっていうね。学生時代も西洋絵画としての完成度みたいなものを求められる感じがあって、どうもそれが自分としっくりこないというような闘いが結構個人的にはありました。それで、そうこうしているうちにインスタレーションっていうかたちになりました。アトリエがないもんですから、寝起きする場所しかないので、そこで作品を保管することもできない。終わったら畳んで押し入れの隅に積み上げていくっていう生活ですから。それでも何か表現に関わっていたい、やりたいっ

ていうことが大きな出発点だったと思います。だから作品ははじめインスタレーションだったんですけど、それだとみんな通り過ぎるだけなんですね。じっくり物を見る人ってあんまりいないんですよ。どうしてなんだろうと思って、これは何度も見せないと人には分かってもらえない、感じてもらえないということを私自身感じたわけです。ですから、もう形にしてしまって、持続して１年後、10年後も見せることが必要になってきちゃったと感じて、オブジェにして形を固めていったという感じです。

fig.1 《妖精》2010年　ミクストメディア　221×55×50㎝　作家蔵（足利市立美術館寄託）

これ（fig.1）も全部自分が着ていた服をちぎってとか、母が織物をやっていたので、織の糸が残ると母は捨ててるわけだから、そういったものを拾って取っておいて、それをつけるだとかいうようなやり方で作っています。これより前は、米とか小豆とか麦とか家の中にある食料とかを使って制作していました。親が心配して食料を送ってくるんですね、米とか。それを食べないでくっつけちゃう、というような制作をやってたんですけど。

これは、実は骸骨が目的ではなくて本当は始め脳を作ってたんです、一生懸命。上から見ると分かるんですけど。骸骨に本当はこんな脳があるわけないですよね。でも脳だって分からせるにはこっち側の骸骨がないと表現できない。大分前なんですけど、ある方に誘われてタイに行ってみたらどうかと言われて、タイのバンコクにシリラート[2]というところがあって（行きました）。そこは病院なんだけど、解剖学の学生とか医者になる人のための勉強の素材がいっぱい置いてあるんです。ベトナム戦争時代にいっぱい農薬を撒いたんですね、（それによる後遺障害や外形的障害として）有名なのは双子の子どものベトちゃんドクちゃんとか[3]。そこには、そういう子どもばっかりの本物の人間の赤ちゃん（の液浸標本）とか、偉い人が勲章をつけたままの骸骨がいっぱい飾ってあるんです。偉い人の骸骨になんとかっていうたすきがついていて、勲章をいっぱいつけているんです。でも、骸骨になっちゃったらみんな同じなのに、それでも肩書があるんだと思っちゃって。不思議だったこともあって、一回作ってみようかなって。シリラートのものは全部背骨から何から肺も骨も全部全身あるんですけど、私は上（の頭部や胸部まで）だけ作ってるんですけど。生き物っていうもの、我々人類だけでなく生があるものは、いずれ朽ちるとこういうものになるわけで、それが一番美しい形じゃないかなと。生きている間はいろいろ貧乏で苦労して今日は食えない、食えたとか色々あるんだけど、もうこうなっちゃえば食わなくて済みますよね。そういうこ

とも魅力的に感じましたし、もう一回そういうものを見直してみたいなっていう。はじめはね、自分の母親もアルツハイマーになったんで急に脳に興味を持ち始めて、脳を作り始めたんだけど、このごろは脳内麻薬っていうタイトルで展覧会や作品の名前をつけたりしています。脳内麻薬っていうのはいわゆる自分の体内からできる麻薬なんです。それは人間だけじゃなく生き物も。私の知り合いに有名な昆虫学者がいましてね、酒井清六[4]っていう。その先生はハサミムシの研究をしているんですけど、先生が言うには、ハサミムシも脳内麻薬が出るんです。死の直前に。それが死を助けてくれるそうです。まぁそれを信じてまして、人間はちゃんと捨てたもんじゃなくて、うんと苦しくなると自分の体内からそれを助ける成分が自ずと出てくるらしい。それをとても魅力的な話だと思ったわけです。絵ばっかり描いてると、ただひたすら人体を描いたり、ただひたすら決められた今までの美術教育の変な法則みたいなのに則って作るんだけど、そうじゃなくて、なんかもっと、それこそさっき言った目に見えない、だけれども実在している、そういうリアリティがあるっていうようなことを見ていくのはおもしろいかなって思ってね。

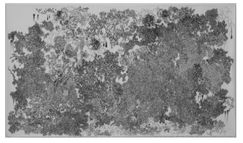

fig.2 《妖精》2011年　鉛筆、紙　114×200㎝　作家蔵（足利市立美術館寄託）
撮影：宮島径©MAJIMA NAOKO
Courtesy of the artist Mizuma Art Gallery

この歯も、ちゃんと自分の歯を見てね、一個一個作って埋めてあります。こういうのを作ってると夢中になっちゃってね。これは出来上がるまでにとにかく何か月もかかるんです、だって乾かないから。何か月もかかるから、１年に１個できればいい方だったり、２～３年かけて１個できたりとか。結構馬鹿馬鹿しい時間がかかるわけですけれども、そのときに鉛筆でいたずらしていたのが出発点で鉛筆画も描くようになったんです。これまた材料費がかからないもんですから。鉛筆と紙さえあればいいので。それで作り始めたら今度はこれもまた止まらなくなっちゃって、馬鹿みたいに朝から晩まで昼も食わないで時間が過ぎていって。それを10何年も続けてるから、立ち上がれなくなって歩けなくなったんです。それで手術して今サイボーグですけど。だから夢中になっちゃうと止まらないんですよ。自分のやってることがわけわからなくなっていくっていうことがだいたい結末っていう。それでもやりたい。

これ（fig.2）を描いてるときは、紙を床に置いて鉛筆で書いていくんですが、はじめに紙の大きさを決めちゃうんですよ。これは小さい方です。だいたい４メーター５メーターのものもたくさん描いています。床に座って鉛筆で描いてみると分かるんですけど、こういう風に（紙を垂直に起こして）描くと違うんですね、線が。これだと「描きまし

た」って（いう線に）なっちゃう。だけど上から描いてると体重が全部かかりますから、非常に生々しくなるっていうか。私はそっちの方を大事に、というかそれが大事だと思ってます。というのも何か構成をして、こうしてああしてっていう美術の造形的なものを追い求めているわけじゃないですから。床に置いて自分の体重をかけて、しかも（鉛筆画を多く制作していた頃の）前の家は狭いですから紙を巻きながら描いて、出来上がってから会場へ持って行って初めて全部見れるっていうようなことも多々ありましたね。大長さんからは「妖精っていうタイトルになってるけど、妖精みたいなものは先に描くんですか、後に描くんですか」って聞かれたんですけど。

――――単純に画面のどこから描いているのかなっていうのが個人的には気になりまして。こんなに大きな紙にすごく小さなものの塊が集まってそれこそ霊気が蠢いているような印象を受けるんですけれど。先ほどの真島さんのお話でも、会場に並べて初めて全貌を見るということだったので全体図がはじめからあるわけじゃないということは分かるんですけれども、どこから描いているのか、素朴な疑問でした。

真　島：あのね、不思議なことに、この絵を描いているとき訪問者があって。それこそこのくらいの灯りかな、もう少し明るいかな。そのくらいの環境で描いていたんですが、「よくこんな（暗い）ところで絵が描けますね」って言われたんです。でもね、もう極端なこと言うと、目隠ししても描けるんです。と言うとちょっと大袈裟だけど、でも描いているときは紙と本人は一体になっていますから。ですから構成とかっていうことは私にとって重要じゃないんですね。一般的にコンポジションっていうのは絵画の重要な要素の一つになってますけれど、それって絵や作品が魅力的であればそんなのぶっ飛んじゃうんですね、やっぱり。それが面白いと思ってます。

――――造形的な構成ではなく、制作中の没入感から生まれるものやそういった感覚そのものが重要ということですね。先ほどオブジェについてお聞きするなかで頭蓋骨というか脳を作っているという話がありましたが、この鉛筆画の真ん中の上の方に描かれているものも多分脳ですよね。

真　島：ええ、そうですね。

――――脳内麻薬の話でもありましたけど、生と死の間を移ろうときに脳がそれを発生させるわけで、頭蓋骨は死の象徴みたいなところもあると思います。この作品はそういったものから命が発生しているように見えて、生と死の世界が循環しているような、その間にいるような感じがして、内容としても今回の展覧会のテーマにぴったりだと思いました。

真　島：わたしは「呪術師」とかね、「妖精」とか「森の精」みたいなね[5]。（そういったタイトルを作品につけていたこともあり、それらを）実際に見たことはないけれども、やはりそれに近いものを感じることっていうのはときどき森の中に入っていくとありますね。よく山なんかに登ったことのある人は多分そんな体感をした人もたくさんいると思いますけど。必ずやっぱりいるんですね。登山家じゃないので登山のノウハウも知らないし、素人が登って行くんですけど。人間を超える、あるところがあって、何かがいるって感じることがありますね。だからみんな、その（何かを体感する）ためにも、苦しい中登山に行ったりいろいろな探検をしたりするわけで、必ず何かいるんだろうね。人類は人類だけで生きているのではなくて、そういう人類の創造物というか、それを感じますよね。面白いなと思います。

――――ありがとうございます。これまで非常に興味深いお話を伺ってきました。ぜひ会場の皆様からもご質問いただければと思うのですが、いかがでしょうか。何かちょっとお話を伺ってみたいという方がいれば。

参加者：私は前からアートを見るのが好きで色々と見ていたんですけど、２年半くらい前から自分でも描いてみようと思って描き始めました。何を描くかといえば目に見えるものを描いたり、ワークショップも好きでこの美術館のものにも行ったりしていますが、そのなかで偶然性で面白いものができたなということはあります。先生の作品ですと目に見えるものや偶然性ではなく、湧き上がるというか湧いてくるものなのかなという気がします。自分もそういうのができたらいいと思うんですけど、湧いてこないです。先生は日常的にそういったものが湧いてきているのでしょうか。

真　島：多分数をまだそこまで描いていらっしゃらないですよね。やっぱりね、取り憑かれちゃうんですよね、ある半分くらいは。トランス状態ってあるでしょう。自分でも、もうここでやめとけばいい（と分かっている）

のに、気が付いてみたらどうも外見たら暗いやっていう。10年も続けるとね、だいたいおかしくなっていくというか。（笑）そこまで数をこなしていないでしょうから、ぜひこれからたくさん数をこなしていくと、ああこういうことだったのかっていうのを体験されるかもしれない。
それともう一つ、現実のものの見方やそれを教育されてしまった私たちっていう問題がありますよね。「ものはこうだ」っていう。例えば「１＋１＝２」のように、もう教わっているんですよね。でも、本当に１＋１が２になるかって調べてみたことのある人は少ないと思うんですけど。まぁだから、それが偶然なのか意図したものなのか、なんでも自分が体感するってとこまでやってみないと。
あるいは、わたしはこれやってるとき（鉛筆画を描いているとき）ノイローゼになって、夜寝てるときも夢で一生懸命描いてるんですよ。やっと解決したと思って朝目が覚めると、夢で描いていたのでくたびれちゃって、自分の作品に向かい合えないときってあるんですよね。もう何というか一種の病っていうかね、多分そこまでいっちゃうっていうか。多分それが大きいような気がしますけど、どうでしょうか。

参加者：自分が絵を描き始めて面白いと思ったのは、写真と違ってあるものをなくしたり、ないものを付け加えたり少し変えてみたりすることができて、絵のそういうところが面白いなと思ったんです。完全に自己流なんですが、結構一生懸命夢中になって描いていて、ちょっと今トーンダウンしているんですが、また描き続けたいと思います。ありがとうございます。

真　島：ぜひ楽しんでみてください。やっぱり自分が夢中にならないとね。

――――ありがとうございます。貴重な機会なので他にもご質問などある方がいれば。ご質問よろしいでしょうか？
それでは、先ほどの質問のなかでも「取り憑かれた」みたいな話もありました。今回の展覧会は、まさにそういったある種、何かに取り憑かれたような、神様が降ってきたような、そういった作家の一面を窺うことができる作品が他にもたくさん展示されています。
最後に、展覧会全体をご覧になった真島さんの感想をいただいて、このトークを締めさせていただきたいと思います。

真　島：皆さんすごい面白い作家がたくさんいるっていることと、やっぱりそういうものに出会ったんだろうなって感じさせてくれる作品が結構ありますよね。楽しませていただいています。良い展覧会だと思います。特にこの碧南市藤井達吉現代美術館の会場は、身近に作品を観られるというか、観た人と作品が一体化できる。大きな美術館の天井の高い大きな部屋で観るのとはまた違って、作品を自分の身体の一部みたいにして観られるのがとても良いと思いました。

――――ありがとうございました。それでは今まで貴重なお話をいただきました真島直子さんに最後盛大な拍手をお願いいたします。アーティスト「ト」トークとしてはこちらで終了とさせていただきます。真島さんのお話を伺った上で、ぜひまた展覧会や作品をゆっくりご覧いただければと思います。本日はありがとうございました。

（註）
1　真島直子（1944～）は愛知県名古屋市生まれ。父は福沢一郎に師事したシュルレアリスムの画家・眞島健三。1968年（昭和43）東京藝術大学美術学部油画科卒業。以後、画廊や美術館での個展、グループ展を中心に絵画やオブジェ、インスタレーションによる作品を発表する。80年代末には反芸術の美術家・工藤哲己との交流のなかで共同してオブジェ等を制作、発表して衆目を集めた。90年（平成２）より〈地ごく楽〉シリーズを発表、2000年頃からは鉛筆による完結した絵画作品としての「鉛筆画」に取り組む。02年、鉛筆画《地ごく楽》で第10回アジアン・アート・ビエンナーレ・バングラディシュ2001グランプリを受賞。18年には名古屋市美術館、足利市立美術館で個展が開催された。近年はオブジェと鉛筆画が融合したような油彩画にも再び取り組んでいる。
2　シリラート病院はタイの首都バンコクのバーンコークノーイ区にあるタイ国内最大最古の病院で、敷地内に法医学博物館、解剖学博物館をはじめとする６つの博物館を有しており一般に公開している。
3　ベトナム戦争中、アメリカの軍事作戦により1961年から約10年間にわたり、ゲリラ兵やベトコン（南ベトナム解放民族戦線）が潜むジャングルの森林や農作物を育てる畑を枯らすため飛行機から大量の枯葉剤が散布された（ランチハンド作戦）。枯葉剤に含まれるダイオキシンの影響によって、大量に散布された地域では死産や奇形児の出生率が上がり、現在も遺伝疾患やがんなどの後遺障害が続いているという。日本では特に、1988年に日本で分離手術を行なった結合双生児「ベトちゃんドクちゃん」こと兄グエン・ベト（1981－2007）と弟グエン・ドク（1981－）が1980～90年代に広く報道された。
4　酒井清六（1924－2004）はハサミムシの分類学者。大東文化大学名誉教授、元日本生物地理学会会長。酒井による世界各地のハサミムシ類標本コレクションが大阪市立自然史博物館に所蔵されている。
5　《呪術師》（2007年　ミクストメディア　92.0×40.0×65.0cm　個人蔵）、《精霊》（2007年　ミクストメディア　125.0×96.0×80.0cm　個人蔵）など。